

国際委員会企画シンポジウム

近隣国と日本における健康の連続性

—Cross-cultural health psychology の示唆—

企画者 田中 共子（岡山大学社会文化科学研究科）

司会者 田中 芳幸（京都橘大学健康科学部）

話題提供者 高浜 愛（一橋大学法学研究科）

金 外淑（兵庫県立大学看護学部心理学系）

畠中 香織（岡山大学社会文化科学研究科）

指定討論者 田中 共子（岡山大学社会文化科学研究科）

【企画主旨】

アジアの近隣諸国と日本は、その地理的な近さから密な関係があり、歴史的な接点や文化的ルーツの共有も少なくない。そうした我々の健康法や健康観、健康問題とその治療や予防の方法は、ある程度類似したものを持ちながらも、近年の社会的文脈下で独自の発展を遂げている。

健康に関する問題の発生と対応をめぐって、我々が共有できる視点や方法論があるならそれは何か。背景に健康文化の連続性という問いを抱えながら、比較文化健康心理学的な発想で、近隣国と日本のケースを具体的に考える機会を持ちたい。

アジア圏を視野に入れた健康心理学を考えていく場合、二つのアプローチが考えられる。一つには文化間の現象を比較することである。健康をめぐる地域間の異同の発見を通じて、健康問題の構造や発生機序の洞察を進められる。ユニバーサルとローカルに関する考察も深まるだろう。もう一つには、文化間の移行者や接触者において、発生した問題を分析することである。社会文化的文脈がいかに健康に影響するかを査定し、健康に関する対比的な文化の特徴付けや、文化の影響範囲を整理できる。集団の文化と個の特徴との関わりについても、省察が進むだろう。これらは我々の健康観や健康への関わり方、さらには対策に潜在する個性を理解する手がかりとなり、別の視点に気付かせてくれる。そこから、新たな発想による発展可能性の端緒が開かれることを期待したい。

今回取り上げる問いは、以下である。近隣国間での文化移行者は、その微妙に異なる環境の中で、どのような健康行動を成立させていくのか。健康法や治療法に浸潤する文化的な差異は、どのような課題を、治療者の側と治療を求める側にもたらすのか。自らが健康ケアの専門家であると同時に異文化滞在者でもある、異文化間ケアの当事者は、複合的な文化差に起因する問題をどのように表現し、周囲はそれをどう受け止めていくのか。

近隣国と日本のケースを手がかりに、具体的な問題の諸相をみていくことで、健康心理学におけるユニバーサルな面と文化特異的な面を認識することができる。そこから従来の主流であった、欧米の視点への合流のみならず、アジアの視点の生成を意識する方向へとつなげていきたい。